

国語科学習指導案

授業者:

授業協力者:

授業学級: 4年1組(男子18名 女子19名 計37名) 会場: 4年1組教室

題材 「明くる日もくりを届けるごんから考えたい兵十への気持ち『ごんぎつね』」

1. 本時の学習計画 全11時間中の第9時

(1) 学習のねらい

ごんがくりを届け続けていてそれに兵十は気づいていなかったのにも関わらず明くる日もごんがくりを届けていることに疑問を感じている子どもたちが、史緒さんの前時の感想を聞き基礎国語辞典の『明くる日』の意味から5・6場面の間のごんの心情を考えることを通して、明くる日にかけてごんが葛藤している心情を抱いていることに気づき、ごんがどんな想いでくりを兵十に届けていたのか想像することができる。

(2) 本時の学習材

史緒さんの前時の感想と基礎日本語辞典の『明くる日』の意味

- 兵十と加助の会話を聞き、おれにはお礼を言わないで、神様にお礼を言うんじゃない、俺は引き合わないなあと言っていたごん。そのごんがどうして明くる日も兵十にくりを届けたのだろかという問いに対して、子どもたちは、ごんが毎日つぐないを行っていたことや兵十に対するごんの気持ちを考えながら想いを語り始めるだろう。そしてその気持ちの変化があったのはどこなのだろうかという意識を捉えたところで本学習材を提示する。
- 本学習材は、5場面の後にほら穴に帰り兵十のおっかあの死を思い出すごんの姿があったのではないかとという児童の感想と、基礎日本語辞典による「明くる日」の意味、「話題とする事柄の生じた次の日」である。このような児童の感想と、翌日のことを「次の日」ではなく「明くる日」と表記し、ごんにとって何か意味のあることがあったのではないかと考えさせられる言葉に出会った子どもたちは、自然と5場面と6場面の間のごんの姿に思いを寄せるようになるだろう。そしてごんが葛藤していく姿を思い描くことにつながっていくだろう。このように、5場面と6場面の間を考えていくことで、明くる日にかけてごんが一つの結論を出し、再びくりを兵十に届ける姿につながっていったのかを想像していくことが期待できる。

(3) 学習の展開

過程	学習活動	予想される子どもの動き	時間	指導と評価
課題把握	1 前時の振り返りを行い、本時の学習問題を確認する。	・ 前回は兵十と加助の会話をやった。 ・ ごんは兵十に自分のやっていることを気づいてほしかったんだよ。 学習問題 ごんはどうして「明くる日」も兵十にくりを届けたのだろうか ・ もっと感謝してほしいんじゃない。 ・ もっと仲良くなりたいんじゃない。 ○ 書いてないからわからないよ。	10'	○ これまでのごんの姿を振り返られるように発問する。 ○ 気持ちの変化を考えようとしたところで学習材を提示する。(ICT機器活用)
展開	5と6場面の間でごんは何を考えていたか考えよう 2 学習課題に対する考えを持ち伝え合う。	・ ごんは兵十に気付いてもらえなくて悲しんでいてすごくやる気なくしてる。 ・ ごんはやっぱり気づいてもらいたかったから気づいてもらえるまでつぐないを続けようって決心したんだよ。 ○ 気づいてほしかったし、つぐなわなきゃいけないのも両方あった。 ○ 仲良くなりたくてでも兵十は気づいて無くてそれをもう思わなくなった。	30'	○ ワークシートを配布し、説明をしながら活動の見通しを持たせる。 ・ これまでの授業で扱ったごんのつぐないへの態度や様子を考えながら「明くる日に向かうごんの気持ち」を考えていく。
終末	3 本時のまとめを行い、感想を記入する。	・ ごんの気持ちが何となくわかった。 ○ ごんは心の中で気づいてほしいって思ってるけどやっぱりつぐなった。	5'	評価 ごんがどんな想いでくりを兵十に届けていたのか想像することができたか、発言やワークシートから捉える

2. 本時に至るまでの子どもの姿

初めて「ごんぎつね」を読んだとき、ごんにやさしい気持ちがあると捉えたYM

初めて「ごんぎつね」を扱い、初感を綴っていく活動で、プリントの「この話の好きなところ」という問いに対して「ごんはいたずら好きだけどごんにも優しい気持ちがあるところ」と記述しているYM。ごんがいたずら好きという1場面の描写を考えながら、その後つぐ

ないをしていくごんの姿やごんの変化の様子が、初めて読んだときに「ごんのやさしさ」と捉えた。その「ごんのやさしさ」というYMの読みがYMにとってこの話の好きなところであり印象に残っていた。

初めて「ごんぎつね」の世界観に触れごんと兵十のストーリーを追っていった第1時の授業では、YMは前述の通りこの話の好きなところとして、「ごんのやさしさ」と挙げている。しかしこの問いの次の問いである「一番印象に残った場面とその理由」は空白のままであった。ごんぎつねという物語がYMに与えている影響や価値はこの時点で「ごんのやさしさ」というあいまいな表現だった。ごんが優しいという印象を与えるのはどの場面のどの出来事からなのであるかと、そのYMの読みのように「ごんには優しい気持ちがある」と感じる子どもたちの姿も見受けられた。教師はどの叙述を基にして考えていたのかクラス全体の課題となるとともに、これからごんぎつねを扱っていく中でその読みは変化していくと考えた。

3場面を読んでいく中で「なんでごんは兵十がいたずらの対象だったのにこんなに優しくしたの」と考え始めたYM

3場面に入り、ごんが毎日兵十にくりを届けている理由を探っている中で、YMがノートに疑問を書いた。それは「ごんは兵十がいたずらの対象だったのにこんなに優しくしたの」というものだった。毎日ごんがくりを届けていたことがYMにとっての「優しい行動」であった。授業の中で、YMの考える「ごんのやさしさ」がごんがひとりぼっちであることと、兵十が一人ぼっちになったことに共感しているのだと気付き始めていた。

YMは1場面のごんと兵十の関係を理解し、毎日くりを届けるところからごんの様子が変化していることに気が付き始めていた。そこに疑問を抱いたYMはノートの片隅にメモ書きとして残していた。この疑問がこの授業の中でのYMにとって叙述と照らし合わせるきっかけになった疑問だと感じた。授業を通して、YMはごんを優しくさせたものは何かを考え続けついにごんと兵十はひとりぼっちでごんがかわいそうだと共感し始めたことに気づいた。このように、ごんに対して様々な想いを抱いている子どもたちがごんの心情を自分事となって考え読みを深めていきたいと考えた。

つぐないの意味からごんの気持ちを読もうとするYM

前時で5場面を扱っている中で、YMはごんが「へえ、こいつはつまらないな」や「引き合わない」と思っている中でも、つぐないの気持ちがあると予想を立てた。それは6場面の叙述から考える姿があり、くりをあげる気持ちは前と変わってないと捉えた。そこから自分たちにとっての「つぐない」の意味を考え、そのことからもう一度ごんの気持ちを考えることができた。前時でつぐないを考え、「ごんはどうして明るく日もくりを届けたのか」という問いに対して「ごんがつぐないをしたかったから」と考えた。その理由として、つぐないの意味を「ごめんなさいや後悔を思っで行動すること」と考えたことから「ごんはウナギのことでちゃんと兵十にごめんねと思った」とごんの気持ちを考えていることが見受けられた。

前時でYMは、5場面でのごんがつぐないの気持ちが「ある」と予想を立てた。それは学習問題の兵十と加助の会話を聞いた「今」という視点がYMに足りていなかったようにも思える。しかし、それだけではなく6場面での兵十へくりを届けている姿が、ごんの「くりをあげる気持ち」がなくなっていることとして捉えてほんの少しでもつぐないの気持ちをごんにはあると捉えているように感じられた。つまりYMはごんが兵十に対してごめんなさいという気持ちを持っていると考えている。そこから「つぐない」とは何かを考えるとYMは「つぐないには必ずごめんねと思う心がある」と結論付けた。YMにとってのつぐないは「必ずごめんねと思うこと」であり、それが明るく日にくりを届けたごんの気持ちとして「つぐないをしたかった」と考えたのであろう。しかしそれは5場面でのごんの様子がYMにとって変化を見つけられていないとも言える。そのごんの引き合わないという心情を捉えられていないように見えるYMがどうすれば5場面と6場面の間を考えることによって、5場面でのごんの引き合わないという心情から6場面の行動へ移っていったのか想像することができるのだろうか。それは5場面と6場面の間のごんに「何かあった」ことに気付くそこから場面間を想像していくことだろう。こういった場面の間に着目すること、つまり書かれていない内容を想像し気持ちを考えることを様々な読みで考えられる授業にしたい。YMにとってごんの気持ちに寄り添って考え想像することやそれぞれの子どもたちが考えを出し合う姿を願って、本時を迎える。